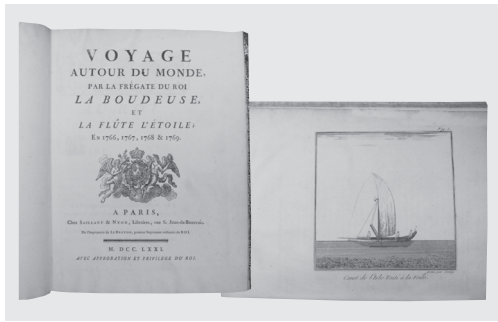


■ソロモン海のブーガンヴィル島

このようにブーガンヴィルは学者を同行させたことから、ポリネシアからメラネシアの島々の詳細な科学的調査が可能となりました。例えば、タヒチでは人々と友好的に接して風俗や文化を確かめています。また、200年にわたってヨーロッパ人の来島が途絶えていたニューヘブリディーズ諸島では、地形や動植物、あるいは住民の生活調査が行われました。その人類学的な調査活動は、この島々の「再発見」であるとも言われています。

また、ソロモン海に浮かぶ「ブーガンヴィル島」は、彼がこの島の沿岸を航行して探検したことから島名として残り、永遠に記憶されることになりました。



Voyage autour du monde. Paris, 1771.
『世界周航記』（本学図書館所蔵）

帰国後の1771年に刊行した『世界周航記』（写真）にこれらの南太平洋の情報が示されたことから、当時のフランス社会で西洋文明に対する警鐘となった「高貴なる野蛮人」の概念が高まり、ジャン＝ジャック・ルソーなどに影響を与えることになったようです。

■航海者の日誌から学者の調査記録へ

ブーガンヴィルの学術調査を重視した航海は、その後の世界周航でも引き継がれていきます。これに伴って、航海の記録も航海者や乗組員の日誌を中心にしていったものから、次第に各分野の専門家の記録を取り入れたものへと変化して詳細なものになっていきます。

このことは、フランスのラ・ペルーズが外交官レセップスや学者を引き連れ日本海から太平洋を航行し、イギリスのクックも三度にわたる

航海で学者や各分野の専門家を同行させ、いずれも科学的な調査記録を書物にしていることから確認できます。その後、日本へ来航したアメリカのペリーも、複数の専門分野の学者を同行させて膨大な連邦議会への報告書を書物に纏めているのは象徴的なところでです。

また、陸上の探検でもこの調査方法が採られ、ブーガンヴィルの航海から32年後の1798年から始まったナポレオンのエジプト遠征では、軍隊に同行した考古学者がロゼッタ・ストーンを発掘して『エジプト誌』に収録しています。⁽⁴⁾

さらに、観点を広げれば学者の調査隊への参加は現代の宇宙開発にも見られ、初めは軍人が搭乗していた有人飛行船やステーションでの調査に各分野の専門家の参加が不可欠となっており、ブーガンヴィル以降の調査活動と同様の軌跡を確認することが出来ます。

■熱帯の花ブーゲンビリア

さて、ブーガンヴィルの太平洋への航海から約175年を経て、日本人は第2次世界大戦をソロモン海域で戦いました。1943（昭和18）年、我が国では「ブーゲンビル島」と呼ばれるこの島の上空で、山本五十六連合艦隊司令長官の搭乗機が撃墜されています。また、同島での米豪新連合軍との戦いで、双方に多くの死傷者を出して終戦を迎えました。

このように、日本や関係した国々では悲しい思いも残りますが、ブラジルで彼に因んで名付けられたとされる美しい花「ブーゲンビリア」は熱帯雨林を中心に世界へと広がり、人々の心を和ませながら優しく咲き続けているのです。

主な参考文献と脚注

- (1) ジョン・ギルバート『図説 探検の世界史』第14巻 集英社 1976年 121頁。
- (2) 山本淳一訳『ブーガンヴィル世界周航記』（シリーズ世界周航記2）岩波書店 2007年 15-16頁。
- (3) 山本訳 前掲書 78-79頁。
- (4) 京都外国語大学付属図書館編『洋書百選』1972年【資料番号】50番（『エジプト誌』）。ナポレオンは2千年前にアレクサンダー大王が研究者を帯同したという故事に倣ったとの見方もある。

おく まさよし（司書・図書館事務長）